

(2) 重度知的障害を伴う無言語の ASD 児のコミュニケーション般化のプロセスの萌芽的研究

Verification of the process of generalizing communication of minimally verbal Children with ASD and severe intellectual disability.

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程 ○藤田 雄大

川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科

諏訪 利明

本稿は、米国ノースカロライナ州において展開される ASD 児者に対する包括的支援体系である TEACCH が開発したコミュニケーション・カリキュラムを4歳の ASD 男児1人に対して適用した事例研究報告である。本研究では、重度知的障害を伴う無言語の ASD 児のコミュニケーション指導のプロセスを検討し、どのように自発コミュニケーション・スキルを身につけ、般化していくかを検証することを目的とする。

方法としては、実践前アセスメント、全8回の個別介入、個別介入終了後アセスメントを実施した。個別介入は TEACCH のコミュニケーション・カリキュラムに基づくものとした。実践前及び個別介入終了後アセスメントでは、コミュニケーションのサンプリングを実施し、子どもが習得しているコミュニケーション・スキルを確認し、比較するためのデータとした。実践前アセスメント等の結果を基に、「遊びの時に具体物で要求する」ことを第1の指導目標

とした。その後、「課題場面・おやつ場面でも具体物で要求する」ことを第2の指導目標とし、般化の指導を行った。アセスメントの様子および全ての個別介入はビデオ撮影し、実践前アセスメントと個別介入終了後アセスメントの様子を比較し、コミュニケーションの状況にどのような変化がみられたか分析した。その結果、療育者が指導目標とした具体物を用いて要求する行動が6回から59回と大幅な増加がみられた。また、個別介入終了後では、遊び・課題・おやつすべての場面で具体物を用いて要求する行動の増加が確認され、指導したコミュニケーション・スキルの般化がみられたといえる。

今回は、自発的なコミュニケーション・スキルをどのように身につけたかということに焦点を当てて報告する。その要因としては、本人の認知スキルや理解レベルに合わせた形態である具体物を使ったことと、日常場面に用いる具体物を使ったため、対象児にとって分かりやすかったことが挙げられる。